

東京駅  
Part-2

岡本  
卓也

人 物

市川昇（30）会社員

市川妙子（60）昇の母

市川実希（29）昇の妻

○東京駅新幹線待合広場

待合広場のベンチに荷物を抱え座る市

川妙子（60）。妙子の向かいに座る

市川昇（30）と市川実希（29）。

妙子「もう帰んなさいよ。お母さんもう大丈

夫だから」

市川「いいって。新幹線出るまで、あと三十

分くらいあるし、ホームまで見送るよ」

妙子「実希ちゃん、ごめんなさいね。せっか

くの休みなのに」

実希「こちらこそ、せっかく東京まで来てく

ださったのに、全然お構いできなくて」

実希が市川の腕を肘で突く。市川、意

を決した様子で妙子をじっと見つめ。

市川「母さん、ちよつと大事な話があるん」

妙子「ちよつとお土産買ってきていい？」

市川「え？」

妙子「お父さんに東京土産に鳩サブレ買って

くるように言われてたの。忘れてた」

市川「いや前も言ったと思うけど鳩サブレつ

て東京土産じゃないし鎌倉土産だから」

妙子「え、そうなの。東京じゃないの？」

実希「鳩じゃなくてひよこじゃないですか」

市川「違うって、ひよこも元は確か福岡発祥

でしょ。東京バナナでいいよ」

妙子「バナナとサブレじゃ全然違うじゃない」

実希「お父さんはサブレが食べたいのよ」

市川「好きにしてくれ」

妙子「じゃ、お母さんちよつと行ってくる」

実希「あ、私も一緒に行きましょうか？」

妙子「大丈夫よ。お土産屋すぐそこだし」

荷物を市川に渡し土産屋に向かい歩き

出す妙子。ベンチに置かれたままの財

布に気づく市川。

市川「母さん、財布！」

妙子「ごめんごめん、ありがとう」

市川「本当、財布忘れる癖いつまでたっても

治んねえんだから」

財布を受け取り歩いていく妙子。

○東京駅外観

小雨が降ってくる。

○同中新幹線待合広場

ベンチに腰掛け話す市川と実希。

実希「いつになつたらお母さんに言うのよ」

市川「だから、さつきも言おうとしただろ」

実希「お母さん、もう気づいてると思うよ、

私たちがもう別れてるって」

市川「え？」

実希「気づかないの？昨日からこの話し切り

出そうとする」と必ず遮って違う話しするじ

やない」

市川「とにかくさ、言うのは今日じゃなくて

もいいだろ。せつかく東京出てきて楽しんで

で帰るんだから」

実希「あんたが言ったのよ。私達が離婚した

こと、ちゃんと自分達でお母さんに伝えた

いって。何今さら。もう離婚届だつて出し

てるってのに」

実希の携帯が鳴る。立ち上がり電話に

出てその場から離れていく実希。両手

に荷物を持ち大きな風呂敷を背中に抱

えた老婆が突然市川に話しかけてくる

老婆 「あの、丸ノ内線乗り場はどこでしょう」

市川 「あっちの方まつすぐ行けば丸ノ内線だ

と思います」

老婆 「そうですか、ありがとうございます」

老婆が手に持った荷物を床に落とす。

荷物が重たく辛そうな様子。心配そう

に老婆に近づく市川。

市川 「改札までお手伝いしましょうか」

老婆 「すみません、ありがとうございます」

×××

電話を終わった実希が広場に戻ってくる

。そこに市川も帰ってくる。

実希 「どこ行つてたのよ？」

市川 「いやちよつと。あれ、母さんは？」

実希 「知らない、私も今戻ってきたところ」

市川 「新幹線あと五分で出ちやうよ」

実希 「もう先にホーム行つたんじゃない？」

市川「ちよつと電話してみろよ？」

携帯を鳴らす実希。すると市川が手に

持った荷物から着信音が鳴る。

市川「携帯持ってたってなかったのか」

実希「私ここにいるからホーム見てきなよ」

鞆片手に慌ててホームに向かう市川。

○新幹線ホーム

早歩きで新幹線ホームを歩きながら新

幹線の中を覗き込む市川。

市川「何号車だっけな？」

アナウンス「ご案内いたします。北陸新幹線

はくたか567号は間もなく出発します」

不安げな表情でホームを歩く市川。

○同待合広場

実希のところに市川が帰ってくる。

実希「お母さんいた？」

市川「いや、いなかった」

実希「このあたりにもいないし、やっぱり新

幹線乗ったんじゃない」

市川 「いやでも、荷物俺に預けたままだし」

実希 「大した荷物じゃないし、財布はちゃん  
と持ってたでしょ。お母さんのことだから

遅れちゃまずいと思つて慌ててとにかく乗  
ったのよ」

市川 「分かんないだろそんなこと。ただでさ  
え方向音痴だから、迷つてその辺ほつつき  
歩いてるかもしれないし。鳩サブレ買うつ  
ていつてたからその辺探してくる」

実希 「ねえ、じゃ私もう帰つていい？」

市川 「はあ？一緒に探してくれよ」

歩き出す市川。渋々ついていく実希。

○お土産屋

鳩サブレ売り場に近づく市川と実希。

市川 「あの、すみません」

店員 「はい？」

市川 「少し前にセミロングぐらいの髪に、白  
いカーディガン着た六十歳ぐらいの女性が



「買いに来ませんでしたか？」

店員「ちよつとそれだけじゃ、」

市川「そうですね、すみません」

益々不安な表情になり早歩きで店を出

て行く市川。市川を追いかける実希。

実希「ねえ！」

実希を無視して歩く市川。

実希「ちよつとどこ行くのよ」

市川「駅員さんに相談して、構内アナウンス

してもらおう」

実希「あのさ、私もう帰っていい」

振り返り実希を睨む市川。

実希「恵比寿で友達と4時に待ち合わせして

るの」

市川「そんなの断われよ！」

実希「何よそれ。心配しなくてもどうせその

辺お母さんほつつき歩いてるって。アナウ

ンスすれば見つかるでしょすぐに」

市川「好きにしろよ」

歩き去る市川。不機嫌な表情で逆側に

向かって歩き出す実希。

○同中インフォメーションセンター

従業員に話しかけている市川。携帯に

実希からの着信が鳴る。出る市川。

実希「あ、もしもしお母さん見つかった？」

市川「まだ見つかってないよ」

実希「あのね多分違うと思うんだけど、」

市川「表情が徐々に青ざめていく。」

○同中公衆トイレ前

女子トイレの前の列の中に立っている

実希。そこに慌ててやってくる市川。

実希「トイレ待ってたら、なんか一つだけ随

分長く開かない個室があるみたいで。聞い

たら六十歳くらいの女性が入ってたって

言ってる人がいるみたいで。今駅員さんが

上から開けようとしてるんだけど、なんか

、その人今中で倒れてて、」

市川「それで、」

実希「側に鳩サブレの袋があるみたいなの」  
血相を変えてトイレ入っていく市川。

○女子トイレ

動揺した様子で中に勢いよく入っていく市川。中の女性達が驚く。個室から女性駅員が白いカーデイガンを着た六十歳くらいの意識のない女性を肩で支え出てくる。女性の表情は見えない。駅員「あの、ちよつと男性の方は。え、この方のお知り合いですか？酔っ払われて、中で吐いて倒れてたみたいですよ」

表情を覗く市川。妙子とは別人の女性市川「あ、違います。人違いですよ」

床に嘔吐物が入った鳩サブレの袋。

○同中待合広場

ベンチに腰掛けている市川と実希。館内放送が流れる。

アナウンスの声「富山県高岡市からお越しの

、市川妙子様。お連れ様が新幹線待合室でお待ちです、

市川「もう四時だけど。いいの、友達のところ行かなくて」

実希「いいわよ。もう断りのメールしたから。でももし、新幹線に乗ってたら金沢にはもうついてて連絡できるはずだし、それでも連絡ないってことは、、」

不安げな表情で市川。  
実希「もうちょっと待ってダメだったら警察に届けよ」

市川「そうだな。そうしよう」  
突然市川の携帯がなる。実家の文字。

市川「もしもし」  
妙子の声「あ、昇。お母さんです」

市川「お母さん」  
驚いた表情で市川を見る実希。目頭を抑え震えた声を上げる市川。

市川「良かった、」  
涙目で話し続ける市川。